

高校時代に行った特別支援学校でのボランティア体験が その後の進路決定に及ぼす影響の可能性について

早川 雅晴^[1] 植草学園大学発達教育学部

A高等学校の運動部では、顧問が「部員達が思いきり部活動をできる環境の有難さ」を自ら感じてくれることを願って、毎年2回近隣の特別支援学校でボランティア体験を行っている。部員達は、顧問の狙い通りに、ボランティア体験を楽しく有意義なものと感じ、頑張ろうという気持ちを抱いている。さらにそれだけでなく、ボランティア体験をしていない生徒に比べ、有意に高い割合で教育学系への進路を選択していた。この中には、ボランティア体験が自己の進路決定に影響を与えたことを意識している部員だけでなく、潜在的に影響を受けている部員もいる可能性が示唆された。今後は、不足している特別支援教育への意欲を持った教員の希望者を増やすために、高校生によるボランティア体験の推進が重要と考えられる。

キーワード：特別支援学校、高校生、ボランティア体験、進路

1. はじめに

2007年の学校教育法の改正により、特別支援教育はすべての学校で推進されるものと規定され、2013年の改正ではさらに、インクルーシブ教育の推進が打ち出される等、小中学校では特別支援教育が認知されてきている。しかし高等学校の通常学級では、受験や適正・進路目標等により選別され、似た生徒の集団が形成されているため、特別支援を必要とする生徒と接する機会はなく、日常生活で特別支援教育を意識することはない。進路の方向性を決めなければならない高校生の時期に、特別支援とは無縁の環境で生活している。そしてまた高等学校の授業等でも特別支援教育に関する知識・体験不足を補うための手立ては用意されていない。このことが原因で、特別支援教育を目指す高校生が多くないと思われる。

一方で、本学では入学時から特別支援教育を目指す学生がいる。この学生数名に予備調査として志望理由を尋ねたところ、「身近に特別支援を必要とする人がいて、直接・間接的に関わってきた経験があ

ること」を動機に挙げていた。また少数派ではあるが、「中学生及び高校生の時に特別支援学校でのボランティア体験をしていた」ことを志望動機に挙げた学生もいた。現在、特別支援学校の拡充が図られ、教諭の補充が必要とされている中で、それを希望する学生はそれほど多くないという状況にある。今後志望者を増やすためには、現在少数派である「中学・高校時代の特別支援学校へのボランティア体験」が重要な鍵となる可能性が考えられる。そこで高校時代に特別支援学校へボランティアに行った経験が、その後の進路決定に影響を与える可能性についての調査を行った。

2. 方法

2.1 調査対象

調査対象は特別支援学校へのボランティア活動を毎年行っていたA高等学校の女子バレーボール部員で、2010年～2013年の間に卒業した者とした。A高等学校の女子バレーボール部は、全国的な強豪校であり年間の大半を練習に費やしている。練習のな

[1] 著者連絡先：早川 雅晴

いは年間に数日しかないが、その内の2日間、5月に実施される体育祭と11月に実施される文化祭は特別支援学校へボランティアに訪れている。対象とする元部員は、小・中学校の時期から休みなく運動を続けてきているため、特別な場合を除いて、特別支援学校との接点はなく、関心は低いと思われる。また部活動の休みが少ないために、高校生の時期に他の進路選択に影響を与えるような個人的な特別な経験をする時間的余裕がなく、特別支援学校でのボランティア体験が進路決定等に影響を与える可能性が高いと予想される。

2.2 調査方法1

質問紙調査法により、高校時代の特別支援学校でのボランティア体験が自身のその後はどう影響を与えたと感じているかを調査した。調査用紙は、2014年7月上旬に郵送し、回収締切りを8月末日とした。

質問項目の内容は以下で、回答は自由記述とした。

- ①バレーボール部で行った以前に特別支援学校等に行ったことはありますか？ある場合には、いつ・どのようなきっかけで行きましたか？
- ②ボランティアを経験して、印象に残ったことは何ですか？また、そのことに関してどう思ったり感じたりしましたか？
- ③ボランティアの経験は、その後の考え方に影響を与えたと思いますか？（具体的に）
- ④ボランティアの経験は、自分の進路に影響を与えましたか？（具体的に）
- ⑤高校卒業後の進路を教えてください。

2.3 調査方法2

女子バレーボール部員のボランティア体験による影響の可能性を探るため、比較対象としてA高等学校の女子バレーボール部員以外の進路状況をHP等で2010年～2013年まで調査し、特別支援教育・教育学部・幼稚園・保育園等の教員養成課程に進学した者の割合を調べた。その際、学部・学科名だけでは判断しにくいものに関しては、A高等学校の進路指導部職員に尋ねた。

2.4 調査方法3

女子バレーボール部顧問に、「何故毎年特別支援学校へのボランティア体験を行っているのか」と、「どのような活動を行ったか」について、聞き取り調査を行った。

3. 結果

3.1 質問紙の回収率

4年間に卒業した部員の47人に調査用紙を送り、26名より回答があった（回収率55%）。

3.2 質問紙調査及び進路調査

質問項目①の「バレーボール部で行った以前に特別支援学校等に行ったことはありますか？ある場合には、いつ・どのようなきっかけで行きましたか？」に関し、高等学校入学以前に特別支援学校等に行った経験があると回答したのは3人（n=25）で、3人も中学生の時に特別支援学校に通う知り合いに会うために、運動会や文化祭へ行ったと回答している。個人的な繋がりがなければ、特別支援学校との接点が乏しいことは、事前調査と同様の結果といえる。

質問項目②の「ボランティアを経験して、印象に残ったことは何ですか？また、そのことに関してどう思ったり感じたりしましたか？」に対しては、25人から有効回答が得られた。ここでは、「ボランティア活動をして印象に残ったことは何ですか？」と「そのことに関してどう思ったり感じたりしましたか？」の2つの質問が含まれていたために、それぞれの質問に回答しているもの、片方だけに回答しているもの等、回答の視点は様々であった。そこではじめに、「印象に残ったことについて」の回答をカテゴリー毎に集計した結果、「子供が障害があってもみんな笑顔だった」等、子供たちの様子について書いていた者が13人（52%）。「先生方の子供たちへの接し方がすごい素敵」等、先生方の様子につい

表1：質問項目②で印象に残ったことの視点

カテゴリー	人数（割合）
子供の様子	13人（52%）
先生の様子	5人（20%）

て書いていた者が5人(20%)であった。

次に「自分がどう思ったり感じたりしたのかについて」は、15人(60%)より回答があり、その内訳は「楽しかった(4人)」「もっと関わりたい(2人)」「参加できて良かった」「凄いなあと思いました」「また一緒に遊びたいと思った」「頑張ろうと思った」「興味を持った」「充実していた」「ボランティアをもっとしたい」「元気がもらえた」「子供がかわいくて癒された」であった。

項目②には2つの質問が含まれており、これを1つの文章にまとめている回答もあるため、自由記述の回答をキーワード毎に集計したところ、「子供」「障害」という説明に使用される単語を除くと、1番多かったのは、「元気」であった(表2)。特別支援学校の子供たちは、自分達が描いていたイメージとは異なり、とても元気であることに驚いたようである。そして次に多かったのは「楽しい」であった。その他に2人以上が使用している単語に1つもマイナスイメージのものがなかったことから、特別支援学校での体験を良い印象として捉えている様子を想像することができる。

表2 質問項目②の回答で2人以上が使用したキーワード

単語名	使用された回数(回)
(子供)	12
元気	7
楽しい	6
(障害)	5
かわいい	5
先生	4
すごい	4
笑顔	3
興味	2

質問項目③の「ボランティアの経験は、その後の考え方に影響を与えたと思いますか?」に対し、16人より回答が得られた。その内、1人だけ「分からない」と回答していたが、残りの15人は自分の生き方や考え方に影響を与えたと回答している。その内訳は、14人が「頑張ろうと思った(9人)」「やる気が出た(2人)」「当たり前のことが当たり前じゃないと思うようになりました」「何事も努力しようと思

った」「勇気が出た」「一日を大切にしようと思いました」という前向きな回答であった。残る1つは、「先生になろうと思った」と、進路に直接的に影響を与えたとの回答であった。この元部員は現在幼稚園教諭になっている。

質問項目④の「ボランティアの経験は、自分の進路に影響を与えましたか?」の問いは、質問項目③と共通する部分が多いが、質問項目③で「先生になろうと思った」と回答した元部員を含め、26人中7人(26.9%)が「先生になりたいと思った」と回答している。そして7人全員が教師もしくは保育士を目指して教育学系の大学・短大に進学している。ここで特別支援学校でのボランティア体験に影響を受けているにも関わらず、進路の希望が特別支援学校の先生に限定されていないのは、特別支援学校での先生と生徒のやり取りや子供との接し方の中に、教育の原点を感じ取ったからではないかと推察する。

質問項目⑤で尋ねた高等学校卒業後の進路先は多岐にわたるため、教育学系(幼稚園教諭・小学校教諭・保育士の養成の大学等)とそれ以外に分けたところ、女子バレーボール部員が教育学系の進路を目指している割合は、46.2%(n=26)であった。これはA高等学校の女子バレーボール部員以外の卒業生が4年間に教育学系へ進学した割合8.5%(表3)と比較して有意に高い(χ^2 検定: $p < 0.01$)。

表3 A高等学校の女子バレーボール部員を除いた進学先における教育学系の割合

年度	教育学系への進学割合
2010	10.5% (n=200)
2011	8.4% (n=203)
2012	8.1% (n=209)
2013	7.1% (n=210)
平均	8.5% (n=822)

質問項目④の結果からは、ボランティア体験によって教育学系への進路選択を意識したのは26.9%であったが、実際には46.2%の元部員が教育学系の大学等へ進学している。この差が生じた原因として、ボランティア体験に行く前から教育学系への進路希望が固まっていたことも考えられるが、進路決定に際してボランティア体験が潜在意識に影響を与えている可能性も否定できないと考えられる。

次に、同じボランティア体験をしても元部員によって進路決定へ影響の度合いが異なるのは、ボランティア体験での感じ方や視点に違いがあるのではないかと考え、質問項目②で、「先生の様子」について記した元部員5人の進路を調べた。視点を子供だけでなく先生に向けるのは教師に関心があるからではないかと考えたからである。しかし、教育学関係に進んだのは、2人だけであり、視点の違いは進路決定には影響していなかった。また、表2のキーワード毎に教育学系への進路の割合を比較したが、いずれも進路決定に有意に影響を与えてはなかった (χ^2 検定：ns.)。

3.3 バレーボール部顧問への聞き取り調査

バレーボール部顧問が毎年部員全員を特別支援学校へのボランティアに参加させてきたのは、「部員は目標が高く常に努力をしている一方で、精神的にも肉体的にも厳しいため、上手くいかなかったりすると、時に厳しい練習から逃げたい気持ちや手を抜きたい気持ちが出てくることも考えられる。その時に、自分をごまかそうとする気持ちに打ち勝つための心の支えの1つとして、ボランティア体験を通して『自分たちが思いっきり部活動をできる環境の有難さ』を感じてくれることを願って」からとのことであった。質問紙調査の結果でも、自分たちの置かれている環境への感謝の言葉が綴られており、顧問の思いは伝わっていると思われる。

4. 考察

バレーボール部顧問は、目の前の部員へ向けて、常に感謝の気持ちを忘れないでいることを期待して特別支援学校へのボランティア体験を実施してきたが、元部員の中には生き方についてのメッセージとして受け取るだけでなく、自身の具体的な進路決定にまで影響を受けた者までいることが確認できた。

今回の調査はサンプル数が十分に多いとは言えないことと、質問に答えてくれた元女子バレーボール部員が高校時代にバレーボール以外の経験が少なかつたため、特別支援学校でのボランティア体験の

影響が過剰に影響を与えた可能性が考えられる。しかし少なくともA高等学校のバレーボール部員においては、特別支援学校へのボランティア体験によって特別支援教育を含む教育全般に関心を持つようになり、意識的あるいは無意識に教育系への進路を選択していることが示唆された。

2012年7月に文部科学省・初等中等教育分科会より示された「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」では、特別支援学級と通常学級内での特別支援を必要とする子供との交流及び共同学習の推進が求められている。この実施に際しては制度の整備は言うまでもなく、人材の確保が必要と考えられる。しかし、現状において特別支援教育について学修した教員が、通常学級では十分に確保されていない。今後は、通常学級においても特別支援教育について学んだ教員が必要であることを広く知ってもらうように働きかける必要がある。そして、このような教員を希望する高校生を増やしていくために、高校生を対象とした特別支援学校へのボランティア体験をできる機会を増やしていくべきと考える。

5. 謝辞

本調査の実施に当たり、國澤智美先生に多大な協力をいただいた。また、質問用紙の発送と回収に関して山崎萌美さんに協力いただいた。両氏の協力に感謝する。

6. 文献

- 1) 文部科学省. 特別支援教育をめぐる制度改正について. (オンライン). http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/014.htm (参照2014.9.20)
- 2) 文部科学省. 学校教育法施行令の一部を改正する政令の概要. (オンライン). http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1339336.htm (参照2014.9.20)
- 3) 文部科学省. 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告) 概要. (オンライン). http://mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321668.htm (参照2014.9.20)

The Possibility that Volunteer Experience at Special Needs Schools During High school Influences Future Career Decisions

Masaharu HAYAKAWA^[1] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

The coach of a certain high school athletic club takes the club members to a nearby special needs school to volunteer twice a year because she expects that her students may appreciate the possible environmental value of making full use of the club. Club members felt that volunteer experience was significant and enjoyable, and they decided to make efforts in accordance with the aims of the coach. In addition, they chose to major in education at college in a significantly higher proportion than those who had no volunteer experience. One member in particular was aware that volunteer experiences had influenced her own educational path. The possibility that other members had been unconsciously influenced by volunteering was also suggested. It is thought that the promotion of volunteer experience for high school students will be important in the coming years for increasing the number of applicants with the will to teach special needs students.

Keywords: Special needs school, High school student, Volunteer experience, career path

[1] Masaharu HAYAKAWA

